

はじめに

豊かな生物多様性と健全な生態系は、「人類の福利の将来」への原点であり、人類そのものの生存基盤でもある。地球の生態系の一員である人類のいとなみ、とりわけ文明化、都市化は、人々に便利で豊かな生活をもたらした。しかしその一方で、さまざまな人間活動は、地域レベルから全地球レベルの生態系に大きな変化を生じさせた。人口増加及び人間の影響による自然破壊や環境汚染は、地域の生物多様性および生態系機能を衰退・悪化させ、現在では地球温暖化という人類共通の危機をもたらしている。

このような状況のなか、2001年から2005年、コフィー・アナン前国連事務総長の呼びかけによって95カ国の科学者が参加したミレニアム生態系評価（Millennium Ecosystem Assessment: MA）が実施された。これは地球規模での生態系評価のほか、地域レベルでの生態系評価（Sub-global Assessment: SGA）もおこなわれた。その結果「人間の活動により地球上の天然資源は枯渇しつつあり、環境への負荷のため、必ずしも地球上の生態系が将来世代を支える能力があるとはみなせない。したがってその保全・再生のためには政策や慣行の大幅な改革が必要である」と結論づけた。

日本の生態系の地域レベルの評価は、2010年に愛知県名古屋市で開催される「生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）」での報告を目指し、長い歴史の人と自然のかかわりのなかで育まれた日本の里山里海に対する評価（里山里海 SGA）として国連大学高等研究所を事務局として2006年11月から開始された。この里山里海 SGA と連動し、環境省では人間と自然環境の持続可能な関係の再構築を目指した「SATOYAMA イニシアティブ」を進めている。

人・自然・文化が一体となって互いに調和・共存する里山里海の領域を持続可能な生態系のモデルとして、その構造と機能を明らかにし、またその現状と課題を整理していくことは、人々が求めている持続可能な社会への第一歩と言える。

2008年3月に都道府県レベルでは日本で最初の生物多様性戦略「生物多様性ちば県戦略」を策定した千葉県は、同年9月に「千葉県の里山里海 SGA」プロジェクトチームを結成した。千葉県の特性として、日本列島のほぼ中央に位置し、丘陵から平野、海への変化に富んだ地形、また気候においても暖温帯から冷温帯の移行帯にあたる豊かな自然環境、そしてさらにその豊かな自然環境を基に成立した歴史と文化が存在する状況をふまえ、里山里海の現状、特に都市の関係を科学的に解析し、その課題を明らかにしつつ将来に向けたシナリオづくりを目指している。今回はこれまでの調査解析をふまえ、その中間報告としてまとめたものである。

本報告書の作成に際しては、国連大学高等研究所、千葉県立中央博物館はじめ、多くの機関及び関係者の方々から貴重な資料・情報をご提供いただいた。皆様に感謝申し上げます。

国連ミレニアム生態系評価「日本における里山・里海のサブ・グローバル評価」千葉サイト
「千葉県の里山里海 SGA」総括 千葉県環境生活部 参事 庄 司 英 実